

小池辰雄

1977年10月2日

藤井武先生 指導性の中の本もの 無教会の審き ディバイン・リベンジ 按手 南無エホバ
 天賦天職 現象の奥 悪鬼に憑かれたる者 寂しき処 煩惱即菩提 告白 キリストの権威
 わが意なり 靈的な癌は罪 根源の現実

【マルコ1・29～45】

²⁹会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの家に入り給う。³⁰シモンの外姑、熱をやみて臥したれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。³¹イエス往きて、その手をとり、起こし給えば、熱さりて女かれらに事つかう。

³²夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、³³全町こぞりて門に集まる。³⁴イエスさまざまの病を患う多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いいだし之に物言うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。

³⁵朝まだ暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、其処にて祈りいたもう。³⁶シモン及び之と偕にある者ども、その跡を慕いゆき、³⁷イエスに遇いて言う『人みな汝を尋ぬ』³⁸イエス言い給う『いざ最寄の村々に往かん、われ彼処にも教を宣ぶべし、我はこの為に出で來りしなり』³⁹遂にゆきて、遍くガリラヤの会堂にて教を宣べ、かつ悪鬼を逐い出し給えり。

⁴⁰一人の癪病人、みもとに來り、跪ひざま詣こ請いて言う『御意ならば我を潔くなし給うを得ん』⁴¹イエス憫あわれみて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』⁴²と言ひ給えば、直ちに癪病さりて、その人きよまれり。⁴³頓やがて彼を去らしめんとて、厳しく戒めて言い給う、⁴⁴『つつしみて誰にも語るな、唯ゆきて』⁴⁵を祭司に見せ、モーセが命じたる物を汝の潔きよめのためささに獻げて、人々に証あかしせよ』⁴⁵されど彼いでて此の事を大に述べつたえ、遍く弘め始めたれば、この後イエスあらわに町に入りがたく、外の寂しき処に留まりたもう。人々、四方より御許に來れり。



● 藤井武先生

これは妙なもんだね。私の集会に来て私をよく目で見ている人と、雑誌や私の書いたもので読んでいる人と、果たしてどっちが本当に私を知っているかということが、或る角度からは言えるくらいなものですね。しかし、福音というものは両面が大事なんです。直接に接して、私みたいな破れ器を通してでも、本ものが現れている。それを直かに受けとらながら、また書いたものを読む。そうすると、非常にそれでしみ込むという面がありますので、皆さんは、どうぞ、そういう意味において、大いに福音をしつかり受けとつてもらいたいと思う。

私は、藤井武先生に親しく5年間（日曜集会に）無欠席でこやつかいになつたわけです。藤井先生の奥さんというのは、ユニークな奥さんでね、藤井先生があのよう位しまれるのも当然のことなんです。だから、藤井先生の結婚観というのは再婚否定なんですね——「だから」と言つたらわるいけれども——そういうご自分の体験から、そういうことになつてゐる。しかし、先生は先生。内村先生は内村先生。一人ひとりみんな、私が言つてゐるよう、結婚観ではない。それは結婚路です。各々の足で歩く。人生の真理は自分の足で歩かなければ、本当につかめない。内村先生は三度結婚した。再婚、三婚ですね。しかしながら、内村先生は内村先生。藤井先生は藤井先生。それぞれその人を通して、路が示される。それを告白しているわけです。

人間は、要するに、告白の他はできないんです。また、本当の意味で告白しなかつたら、それはうそものになる。頭でものを言うことになる。藤井先生は、そういう意味で、彼の実存を、生涯を通して告白したところに先生の結婚観というものが出来たので、その角度において真理です。

真理というのは、いわゆる普遍妥当ではないんですよ。普遍妥当ということは、数学の世界はそうです。「 $2+2=4$ 」これは普遍妥当です。しかし、人生の真理はそうはいかん。そういうつたそれぞれ特殊の、その人でなければならぬ路が神さまに示させられて、そこを本当に歩いたら、その人にとってはその特殊性において根源的な真理が反映している。

この人は丸、あの人は四角。この人においては丸において無限なものが現れている。また、あの人においては四角において無限なものが現れている。これを比較して、

「どちらが本当か」

なんて、そういう議論をしたらダメなんです。

「そこに於いて本ものが現れているか」

だけが問題なんです。そうすると、それぞれの、

「この三角も本ものだ。この丸も本ものだ。この四角も本ものだ」

ということがつかめてくる。この世界をもつていなければダメなんです。これが私が言つてゐる、無の境地なんです。ここには無量のものがある。



私は著作集第三巻の『無の神学』で徹底的にやりますから。世界の神学に対しても私は、あるいはドイツ語で書きたいくらいです。

●特殊性の中の本もの

そして、この特殊性において本ものを見なくてはいかん。その特殊性を見て、「私もそういうようにしたい」

と言うならダメなんです、そこにおいて現れたものを外側から真似るのは。コスモスはコスモスなんだ。菊は菊なんだ。菊に「コスモスになれ」と言つたつて、なれない。コスモスに「菊になれ」と言つたつて、なれない。

「あなたは本当にコスモスらしいな」

「あなたは菊らしいな」

という、その「らしさ」が本当に現れていることが大事なんです。

私も、なにも藤井先生の真似をするわけではないけれども、私は自然にコスモスが好きです。正直、私もコスモスが好きですよ。藤井先生が好きだったから、好きだなんて言つてはいるのではない。昨日、テレビでコスモス畑が出た。あれが全部咲くと、一億の花が咲くそうだ。もう、花に酔つてしまふよな。私は、こないだ黒姫でコスモス畑に行つて、中で写真を撮つた。本当にそこを去るのがいやになつた。あの辺で死んだ方がよかつた（笑）。それくらいにコスモスが好きなんだ。

そういうつかみ方をしてくださいね。とにかく、人真似はいかんですよ。

『イミタチオ・クリスティ』（キリストに倣ならいて）

という本があるね。私はトマス・ア・ケンピスのあの本は好きだよ。けれども、あの題はあまり気にくわないので、

「キリストにならいて」

なんて。イミテーションなんて。キリストのイミテーションではダメだよ。「キリスト即」の世界に入らなくては。即キリストに。『イン クライスト』という本がある。これはアンドリュー・マーレーという人の本です。これもトマス・アケンピスに似たような内容の本です。ア・ケンピスの中身はいいですよ。中身はいいけれども、その表題が気にくわん。もつとも、パウロも、

「我にならえ」

なんて言つてはいるね。けれども、「我にならえ」というあの言い方は、パウロは、

「我に真似しろ」

という意味ではないんだ。言葉に躊躇いたらいかんですよ。



●無教会の審き

「藤井先生のことを語れ」というなら、私は負けないよ。実は今日は、藤井先生の義理の弟、中山（クイチ？）、林学をやつた人です。もう停年を過ぎた人。それから、酒枝義旗、早稲田大学の経済学の教授で、これも停年でやめた。どこかの大学の学長もやつた人だ。この酒枝君というのは、私が大学の3年生のときに、彼は私よりか六年先輩で、その結婚式を私がやつてやつたんだ。藤井先生は身体の調子があまりよくなかったから、

「小池君、やつてよ」

「はい、やります」

なんて。私が結婚式をやつた。私が結婚式を最初にやつたナンバーワンが酒枝君だ。私が大学3年のときだよ、まだ結婚もしないのに。

それから、佐藤勲、これは青山学院の学生だつた。藤井先生の集会に私と一緒に行つていた。これと私は親友ですよ。毎週、先生の所で会うのに、毎週、手紙を書いているんだ、お互に。まるで恋人同士みたいに。佐藤君の手紙はたくさん残つているよ。

私は、とにかく、手紙だの葉書だのは全部とつてあるからね、用件でないものは。あそこに物置があるでしょ。あの中は手紙と葉書ばっかりですよ。あれをひつくり返したら、私は日記なんか書いてなくとも、自分で書けるよ。

「ああ、あの時はこうだつたな」

と。まあ、大変なもんだね、私は大体それに返事を書いているしね。私は今までどれくらい、何通書いたか。あれをみんな書かなかつたら、家が一つ建つてしまつたね（笑）。余計ことばかり言つてゐる。

それから、もう一人、小学校の校長さんをやつた、中井菊一郎君。この四人。この四人で、今日午後から、藤井武記念講演会を阿佐ヶ谷の待晨館で——酒枝君の集会の待晨堂が建てたお堂があるんだよ——そこでやる。私には一言も言つてこない。それは

「小池は変わつた。あれは藤井先生からそれでしまつた」

というわけです。だから、私はその仲間には入らない。

私は言うよ、

「わが時來たらず」

と。私の時はまだ来ていない。あれはみんな本当に親しいご連中だつたけれども、私がこの使徒的信仰になつたら、みんな無教会は私を審いた。何人敵がいようが、私はびくとも

しませんよ、本当の世界に入つてゐるんだから。

「お氣の毒ですね」

と言いたい。実力は、本当はこつちが持つてゐるんだから。私が持つてゐるのではない。私の中にあるキリストが持つてゐるから。それだけのことがはつきり言えるような無教会がいないんだ、今は。



● ディバイン リベンジ

内村鑑三、藤井武、塚本虎一、手島郁郎、この素晴らしい四人に、それぞれの特色をもつた四人に、私はぶつかっている唯だ一人の人間です。私は五人目なんだ。けれども、まあ、私は今、あなた方だから、言つても構わないと思うけれども、そんなところはもう乗り越えているんです。それで、私には最後の使命がある。それを果たすまでは、私は死ぬわけにいかない。そういうことは全然、分かつていません。だから、もう仕方がない。私は書物でもつてそのことを書き残すよりか仕方がない。あなた方、少数の人には語りますけれども。

時が審くでしよう。「ディバイン リベンジ」（神聖なる復讐）という言葉を藤井先生がいつか言つた。私はこの「ディバイン リベンジ」をやるよ。私がやるのはない。私の中にいまし給う聖靈が、神さまがなさる。

「復讐は我にまかせよ」

と、聖書に書いてある。その通りです。「復讐」なんていう言葉はあまり好きではないけれども。そういう戦いだもの。戦いだけれども、実はもう戦いではないんです。次元が違う。私は敵とも思っていないですよ、正直。本当に聖靈の世界に、パウロ・ペテロ・ヨハネと同じような世界に、彼らの誰かが入つてござらん。そうしたら、

「小池さんは本ものだ」

と言う。ところが、誰も言えないんだ、入らないから。

「預言者は故里にいれられず」

と言うけれども、私は本当にキリストと一人つきりで、独りで一向差し支えないよ。もう、何とも言えないです、正直。だから、私は無者と言わざるを得ないんです。

「何ものでもありません」

と。自分を何か思つてゐるうちは、本当の世界に入れないから。本当の世界に入つたら、これはもう何とも、説明なんかできるものではない。だから、「組織神学」なんて、

「神さまの真理が組織でなんか表せるか」

というので、私は第三巻（『無の神学』）でやるんだから。

そんなことで、今日は片一方ではやつてゐるけれども、人間的なところにちょっと信仰がくつついたようなもんだよ、悪口言え。悪口でもないけれどもね。無教会が信仰を私しているうちはダメ。信仰の世界も、私する世界ではないんです。

今度の第五巻『百世の師ヒルティ』は、私はヒルティをたてまつてはいないです。ヒルティは実に素晴らしい導者ではある。けれども、私はヒルティととつくんで、そこで言いたいことを言つてゐる。教育者または青年たちには、ぜひヒルティは読んでもらいたい。白水社があんない著作集を出しながら、ちつとも再版しないから。そこで私の本でもつて、生粹なものを紹介してゐるわけです。



昨日、第五巻がちょうど出来たので、本の献辞を天野先生に捧げてあるから、天野先生の所へ持つて行つた。先生は一昨日が誕生日で、満93歳です。私とちょうど20年ちがう。先生は私に、これで今までに3回、昨日で3回言われたね、

「小池君、もう私もそう長くはないだろうから、私が仆れたら、君のキリスト教で司式をしてくれ、君さえよかつたら。大学は困る。日白の高等学校でやつてくれ」と。

天野先生は、ヒルティーと内村鑑三です。天野先生は一高時代に、内村先生の集会には、雨が降つても風が吹いても雪が降つても行つていたんですよ。

「いわゆる無教会は、僕は嫌いだ。けれども、内村先生に対しては敬意を表せざるを得ない。自分の精神生活の土台を築いてくれたのは、内村鑑三とヒルティーだ」と言われました。そういうことをかつて聞いてますから、そこで、私はこの『百世の師ヒルティー』を先生に献げたんですよ。

● 振手

今日はマルコ伝1章の29節からです。マルコ伝なんて言うと、全く私は福音の振りだしに戻つた氣持で、若返つてしまふよな。もうこれで37年、聖書を全巻やつて、また振りだしに戻る。

²⁹会堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴いて、シモン及びアンデレの

家に入り給う。

ヤコブとヨハネを伴いて、シモン及びその兄弟のアンデレの家に入った。ヤコブ、ヨハネ、シモン——シモンというのはペテロですよ、後でペテロという名前になる。キリストから頂いたから——それと、アンデレ。アンデレというのは後であまり出てこない。だから、ヤコブとヨハネとシモン・ペテロ、これがキリストの直々の弟子です。いつもこの三人はよく連れておられた。そんなに直々でありながら、聖靈がくだらない。申し上げているとおり、十字架を通らなければ聖靈は来ないんです。

³⁰シモンの外姑しゆうご、熱あつをやみて臥ふしたれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。

³¹イエス往きて、その手をとり、起こし給えば、熱あつきりて女かれらに事つかう。

もう実に簡単ですね。手をとるとか、手をおくとか。振手あんしゅという手を振く。振手礼なんていうのは、牧師になるときにやるんだけれども、そのやる牧師さんが聖靈をもたないで振手なんかしたって、それは形式ですよ。祈りをもつて手を振けば聖靈が伝わるんだからね、本当の振手ということは。キリストが手をあげば、そうなんです。キリストの弟子たち、使徒たち、使徒行伝はみんなそうです。

あなた方は聖靈を受けたら、ときに神さまに迫られたら、それをやらなければダメですよ。自分でできるだろうか?」

なんて。自分にはできないよ、キリストがなさるんだから。それだけの打ち込みの祈りを



もつて、自分を鍛えてくださいよ。

「なんでも按手は小池先生がやる」

なんて、そうじやないですよ、あなた方一人ひとりがやれるんです。

これは手をとつて、手を握られたわけです。

その手をとり、起こし給え、熱さりて女かれらに事う。

と。キリストのやり方は、いろんなやり方があります。この場合はこういうやり方でした。一人ひとりによつて違う。ただ言葉だけで、パツとやつちやうこともあるし、睡を付けてやつたこともあるし。いろいろある。

●南無エホバ

キリストはその手をとる前に何をなさつたか。もちろん、キリストは祈りの世界にもう入つてしまつてゐるわけです。祈りなくしては、即ち、神の中に南無していなければ——

「南無神さま」

なんだ——神のうちにキリスト自身が祈入していなければ、キリストは決してこういうことをなさらない。

「私は靈的な人物だから」

なんて、自分で思い上がつたら、とんでもないことになる。サタンになるよ、そうしたら。靈的傲慢というのは一番罪が重いんです。これはサタンだから。サタンの手下になる。

「南無エホバ」

ということ。私は「エホバ」という言い方が本当に好きだね。「わが主」(アドナイ)という意味と、「実存者」(ヤーヴェ)という意味との二つが「エホバ」という表現にこもつてゐるから、私はもうこれから「ヤーヴェ」なんて言わない。「エホバ」と言う。学者はみんな「ヤーヴェ」と言つてゐるよ。昔の「エホバ」の方がよっぽどいい。何しろ、私はちよつとつむじ曲がりか何かしらん。つむじ曲がりではないんだ、一番真つ直ぐなんだ。

「エホバの神さま、南無エホバ」

というのがキリストだつたんです。

「南無アドナイ、南無ヤーヴェ」

と。

「アドナイ+ヤーヴェ=エホバ」

です。そうですよ。あなた方はそういう方程式をつくらなくては。

「わが主+実存者=実存主(エホバ)」

です。私は話しているうちに、すぐそういう方程式が出てくるんだがね、あなた方は聴いているうちに出てくるかね。活眼活耳をもつて、身体で聴いてくださいよ。

もう、いい加減で集会をよそうかな。もう自分で、皆さんのが独り歩きするように。幸い



なことに、私はこの秋はあまり集会ができない。独り歩きしてくださいよ。そこのらの教会なんか行つたつてダメだよ。

「一、三人わが名によりて集まるところに我もあるなり」

「一切のことは働きて、信する者には善となる」という。

「どんなことにでつくわしても、へこたれてはダメだ。どういうことがありましても、キリストと一緒に歩いてください。一緒にではない。キリストを中心に宿して歩いて行く。」

「イン・クリリスト」「エン・クリスト」「キリストの中に」

です。これが「南無」です。

「南無＝エン・クリスト」

です。

まあね、あなた方の年輩で——あなた方というのは若い人のことを言つてゐるんだけれども。大体、私よりかみんな若いようだけれども——この世界に入れば、もうあとはグングンと力が出てきます、何をやろうが。勉強をやろうが、仕事をやろうが、何をしようが。

今朝方も、お客様さんが突然みえた。

「先生はちつとも変わらない。十年位前と」

なんて。「ちつとも変わらない」ではないよ。頭は少し白くなつたし。だけれども、内側は、変わらないどころではない。逆に、逆比例して力が出てくる。これからが私の本当の生涯だから。この十巻を書いて、それからまた或る大きなものを書くんだから、大変だ。天野先生の年輩には、ぜひとも達するくらいまでやらなくてはならない。もう、しようがないよ、キリストの力が来ているんだから。仆たおれないです。あなた方は本当に、そうなつてくださいよ。私みたいなバカ面をしてても、中身は本もので、私は鈍器晚成という——大器晚成ではなくて——鈍器だ。

● 天賦天職

私は獨協中・高の生徒によく言つたんだ。

「なぜ、そんなにみんな、医科に行くか。専門をやりたいやつは専門をやれ。絵を書きたいやつは絵を書け。大工をやりたければ大工になれ。天賦天職に——天から授かつた自分の才能に、そこに天職がある——それに打ち込んでいくと。ドイツ人は大体そういう自覚でもつて、彼らは自分の「ベルーフ」に——「ベルーフ」は正に「天職」なんだ。天から呼ばれているところの職業を「ベルーフ」という。英語の「ゴーリング」です——打ち込んでいく。マルチン・ルターがそのことをはつきり言つてくれた。天賦天職に思い切り打ち込んでいく。落第点を片一方でとつたつていいよ——そんなことを生徒に言つたらうまくないけれども——



「まあ、最低の点はとりなさい。基礎的なことだけは、どの科目もしっかりとやりなさい。しかし、向かないものは、あまりそれをやつていると力が分散してしまってから、一番向くものに全力を注げ。私はこの科目は絶対に優をとるというように」と。私は、すべての生徒がどれか必ず優をとつてもらいたいんだ。どれもこれも訳の分からぬような点をとつていては。

「でも、平均点はあります」

なんて、ダメだよ、そんなのは。今度、学校の朝礼で言つてやろう。

ドイツのギムナジウム（中学）でも、午後はほとんど授業はないんですよ。せいぜい一時

くらいまで。あとはみんな、先生とよく懇談して、

「ああ、君はこつちの方の、こういう本を読みなさい。こういうことをやりなさい」

と指導を受ける。あとはもう、自分で自由研究だよ。だから、打ち込むんだよ、ドイツ人は。夏休みは長いし。遊んでいるんじやない。みんなそういうふうに打ち込む。それで、それぞの、マッチするところのいろんな種類の学校がある。そこへ進んでいく。なにも大学なんか行きはしませんよ。日本みたいなレッテル大学生ばっかりで、みんな大学へ来たら、入れないような大学がある。大体、学生が何%休むことを計算して採つてている。冗談じゃないよね。そんな大学だから、ドイツ人は

「恐ろしい」

と言つて、あきれてしまう。しかしまあ、獨協は比較的いい方でしよう。けれども、もつと意欲が欲しいね、打ち込みが。先生も生徒も。話がズレて困るな。ごめんなさい。では、マルコ伝にもどります。

●現象の奥

キリストは、

「手をとりて起こし給えば」

という、その手をとる前に神さまと手をとつてているんだ。神さまに手をとられていてるんだ、キリストは。神さまの手に捕らえられてから、今度は熱の女の人の手をとることができ。キリストはその前に、いつも神さまの中に入っている。

「そんな素晴らしい現象が起きましたか」

ではダメなんです、

「この現象の奥は何か」

ということをいつも見なくては。ベートーヴェンの音楽の奥は何か、レンブラントの絵の奥は何か、ロダンの彫刻の奥は何かと。彼らの魂をさぐらないで、作品の

「こういう手法はどうだこうだ」

なんて、枝葉ばかり見てる。ダメだよ。



私は『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第二巻）を書いたけれども、芸術に限らない。すべて、この魂の問題です。語学だつてそうなんです。言葉を通してその国の精神が、ハートが滲み出ているんです。それをつかまなかつたら、語学の勉強をしたつて、会話が出来たつて、何だというんだ。くだらないよ、そんなことは。ところが、この頃の語学は、

「スピーチだ、ヒヤリングだ」

なんて、^{うわづら}上^{うわづら}面なことばかりで、ガイスト（精神）の世界に、スピリットの世界に触れていない。そんな語学の教育はやめた方がいいんだ。だから、教科書を見たつて、そんなような内容ばかりだ。ノーブル（高尚な）詩なんかありはしない。

まあ、世の中は癪にさわることばかりだね。

「汝、何を見るや」

と、エレミヤのようには神さまに言われたら、

「私は銀席を見る」

「汝、よく見たり」

と。どうですか、シルバーシートは。あんなものが有るのがそもそも日本の恥です。東京の恥です。しかも、そこに腰掛けているのは若者ばかり。こないだ、白髪の老人が来たから、

「あなたはこの老人と代わつてあげなさい。ここはシルバーシートではないですか」

と言つたら、黙り込んでいやがつて立とうともしないんだ、その野郎は。そういうのは私は初めてだね。回りの人もただ平気な顔をしているんだ。これが日本人の今の姿ですよ。こんなことではもう精神的に滅びです。あなた方は憤慨しないですか。ハイジャックなんかはもう言語道断だ。正直、もう20世紀はおしまいだ、世紀末的だ。

藤井先生や内村先生が憤慨している以上に、私はもつと靈的な角度から憤慨しているんです。それをね、

「小池はちょっと藤井先生から変わった」

なんて、

「何をぬかすかっ！」

と本当は大喝してやりたいんだ。ただ「無教会主義」なんでものに、そんなところに拘泥^{こうでい}しているような、そんなケチな魂じやないんだ、こつちは。内村鑑三先生はいわゆる無教会主義ではないです。藤井先生だつてそうです。今に、私は時が来たら、一人でやるから。

●悪鬼に憑かれたる者

³² タとなり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者を

イエスに連れ來り、

普通の病とか、悪鬼に憑かれた靈的な病ですね。



³³全町ごぞりて門に集まる。³⁴イエスさまざまの病を患う多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いだし之に物言^{ゆる}うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。

悪鬼だけが、イエスが神の子であるということが分かるんです、これは靈の世界だから。だから、悪鬼を制して、

「まだ私を表すな」

と。他の普通の人には分からないです。

「ナザレのイエスはちよつとこの頃変わつたことを言つたり、したりしている」

くらいにしか分からぬ。ところが、悪鬼は

「これは大変な人物だ、神の子だ」

ということが分かる。氣の世界、靈の世界だから。ただし、こつちは惡の靈だ。だから、キリストがおつかないんだ、やつつけられるから。

「之に物言^{ゆる}うことを免し給わズ」

と。悪鬼を追い出して豚の中にいれてしまつて、崖から落つことして悪鬼を亡ぼした例もあるでしょ。凄いよ、キリストというひとは。もう桁違^{けた}いです。そういうように、片つ端から病を癒したり、靈を追い出してしまつた。

私もかつてやつたですよ、かなり。今は静かだけれどもね。だけども、特別集会なんかで変な靈がいれば大喝するです、

「出でよ！」

と。そういういた靈的ないろいろなものがあるから、

「靈を^{わきま}弁えよ」

とパウロが言つている。

無教会では、要するに、そういうような聖書の次元が分かつていなかから、

「昔は、こういうように『惡鬼』と言つたんでしょう」

なんて言つてゐる。そうじやない。魂がある。魂にはいろんな魂がある、靈には。惡鬼もあるに決まつてゐる。では、

「お前は、靈がないか。魂がないのか」

と言いたい。そうすると、

「私は魂がありません」

なんて誰も言わない。そうでしょ。

●寂しき処

³⁵朝まだ暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処^{とこ}にゆき、其処^{そこ}にて祈り



ただこの一節ですけれども、よく気をつけてください。キリストがいかに祈りのひとであつたか。早天祈祷なんていうのはここから出発しているんでしょうね。

キリストは

「密室に閉じこもつて祈れ」

とも仰つてゐる。けれども、それは形式ではないですよ。雑踏の中でも祈れますよ、電車の釣り革につりさがりながら祈れます。目をつぶつて、雜音は肉の耳に聞こえたつて、一向差し支えない。そんなもので制せられるような魂ではダメです。不思議でしようがないよ、僕は自分自身が。どうしてこんなところまで来てしまつたかと。

祈りにおいて力の源泉に汲むんです。「エール」とは「神さま」のことです。神さまは「力あるもの」という意味です。旧約には「…エール」というのがたくさん出でくる。「エール」「エロヒーム」は「力あるもの」という意味です。その源泉にある。

だから、キリストはいつも神の中に、特に深く祈られている。また、歩いていたつて、どこだつて祈りの世界にある。しかし、静かなところで深く祈ることは環境的には一番いい。曠野とか深山とか。我々は東京なら、みんなが寝静まつたころか、朝まだきか、どちらかです。夜型でも朝型でも、どつちでもいい。とにかく、祈りを抜きにしたらダメですよ。

祈りとは、いつも「南無する」こと、キリストの中に入ること。「入る」と言つたつて、向こうから入つてくるんだ、逆に言うと。同じなんですよ、これは。始めはこつち（こちらからキリストの中に入る方）でいいけれども、あとになると、向こうから入つて来る方が早い。開けつ放しているから。ここにも十字架がある。どつちにも十字架がある。十字架の門を通して聖靈は入つてくるし、十字架の門を通つてキリストの中に入つて行く。楽しいね。こういう本当の意味の、

「十字架と聖靈は絶対に分けることができん」

と、私ははつきり言つてゐるんだ。いいですか。だが、キリストは、もう直接で十字架は要らないんだ。キリストだけは。これはもういきなり（神さまから）直輸入だ。

●煩惱即菩提

今朝、NHKを聞いていると、

「煩惱即菩提」

なんてやつていたよ。

「これはちょっと難しいですね」

なんて、坊さんが言つてゐるけれども。あの坊さんは分かつてゐるのかね、本当は。それから片一方は大学の教授だよ。どつちもちょっとあやしかつたね。

私たちにおいては、この「即」は十字架なんです。あるがままの私たちは煩惱です、罪びとです。けれども、そんなものはもはや問題でない。ありながら、あるがままでありな



がら、問題でない。なぜ問題でなくなつたかというと、

「十字架せられたり」

と。あるがままの自分は、現実は、もはや問題ではない。

「お前の中にもう私（キリスト）がいるよ」

というものが菩提の世界です。これが「煩惱即菩提」なんです。福音は、簡単に誰でもがこれが言える。そこが福音の素晴らしいしさなんです。仏教で煩惱即菩提まで悟るのは大変なんだ。ところが、法然・親鸞になると、南無阿弥陀仏ではこれが言えるんです。南無阿弥陀仏の称名を本当にやつているところには、煩惱即菩提の世界が開示してくる。絶対恩寵だから。ところが、禅宗的な悟りでもつて煩惱即菩提の世界に入るには大変なんだ。やはり、無我という境地がそこに出でこないとね。無我も、しかし、力んだ無我ではダメなんです。

まあ、そこらのお寺参りして、坊さんの話を聞いてごらん。もう、私たちの聖靈の世界で聞いていたら、

「ああ、ああ、そうです」

と、わけなくそんなものは受けとれちやう。だから、私は言つてるんです。これはもの凄いから。

「仏教とキリスト教と、どうしたら少し調和できるか」

なんて、「調和できるか」ではないですよ、仏教も全部込んでしまふんですよ、この福音が。こんなことを言つやつはないだろうね、まあ、しょうがない。

●告白

³⁶シモン及び之と偕におる者ども、その跡を慕いゆき、³⁷イエスに遇いて言う
『人みな汝を尋ぬ』³⁸イエス言い給う『いざ最寄の村々に往かん、われ彼處に
も教を宣³⁹ぶべし、我はこの為に出来りしなり』⁴⁰

キリストは「教えを宣⁴¹べる」という。「宣教」というような言葉はそこから来るわけです。「宣教」というのはもう熟したような言葉になつてしまつて、「宣教師」なんていう。けれども、私がいつも申し上げているとおり、キリストはただ「告白」しているんだ。「宣教」なんて言つて、

「キリストの教えはこれこれでござります。それを畏んで、だんだん実行していきましよう」

なんて、そんなことをやつていたら、そんなものはもう律法の世界だ。⁴²

「福音、福音

と言つてゐるけれど、みんな律法にしてしまつてゐるんだ。パウロの言うとおり、

「異なる福音」

にしてしまつてゐる。キリストは、自分が言わざるを得ないことを言つてゐるだけの話な



んだ。言わざるを得ないことを。これを「告白」という。

³⁹遂にゆきて、遍くガリラヤの会堂にて教を宣べ、かつ悪鬼を逐い出し給えり。

「教えを宣べる」ではなくて、キリストは言葉を伝えている。神の言葉を、神言を伝えている。

「教えを宣べる」

なんて言わない方がいい。「教え」なんて言うと、
「どんな教えですか」

なんて、頭（の理解）に来てしまうんです、すぐ。それで私は頭にくるね、本当に（笑）。そういうような掴み方をされては頭にくるよ、正直。

さつきも、或る青年が就職の推薦状を書いてくれと、やつて来たんだよな。そして、僕の本を見てびっくりしてしまって、

「先生、こんなものを書いているんですか」

「知らないのか、お前は」

「キリスト教つて、むずかしいんでしょう」

なんて。何をぬかすかと。難しいだの、どうやつたら分かりますか、なんて言うから、分かる分からないと、難しいとか、そういう角度でこれに向かってくるから、

いよいよ困るよ。そうじやないんだ。幼子の心になれ、バカになれ。身体からだで受けとるんだ

なんて言つて、私は一席やつたんだ。そうしたら、だいぶびっくりしていた。

「では、先生。就職のことが大体決まつたら、来ますから」

「よし、では、11月から来い」

と。ゼミの生徒だよ。それから推薦状を書いて、私は読んでやつた。

「どうだ、いいだろう」

と。喜んで帰つて行つた。私はざつくばらんに書くからね。

「これは好青年だから」

なんてなわけで。笑つてたよ、一生懸命で。

●キリストの権威

そういう、神の言を伝え、それから片一方は、癒す行為をする。手を使つたり、口を使つたり。キリストはどれを使おうが、みんなこれは靈から來たんです。靈言であり、靈行であるわけです。だから、普通の教えとは違うから、

「権威ある者のかく」

という。この権威は神さまの権威だから。神さまの権威でやつてゐるんだ。

我々はキリストの権威でやるんだから。キリストの権威というのは、頭でいくら言つたつてダメですよ、これは。聖靈が来てなければ言えないです。



だから、手を置けば、靈が伝わる。キリストは

「わが言は靈なり」

と言う。言葉を発すれば、その靈が伝わる。そうでしょ。だから、みんなこれは、癒されたり、助かつたりしている。けれども、まだこれは本当のところに行かないんだ。キリストは天国的な現実をそこに現するけれども、キリストは心の中では呻いていらっしゃる。

「本当は、聖靈を与えなければ、彼らは本ものにならない」

ということは見えている。現象面では、天国的になつてゐるけれども、根源の世界ではまだ天国になつていないんです。聖靈を受けない者はみんな、いわゆる御利益的に受けたから、ダメになつたでしょ。だから、

「いわゆる御利益ではダメですよ」

と言つてゐる。御利益以上の世界が奥の方にあるんだ。

あなた方を通して力が働くんです。やつてくださいよ。かわいそうな人がいたらば、神の中に祈りこんで、キリストにつかまえられて、

「私ではない。主さま！」

と言つてやつたら、即、働き給う。

●わが意なり

40 一人の癪病人、みもとに來り、^{ひざま} 跪^{ひざま}ずき^こ請^ういて言^う『御意ならば我を潔く^{みこころ} なし給^うを得^ん』⁴¹ イエス憫^{あわれ}みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔く^{みこころ} なれ』と言^い給^えば、⁴²直^ちちに癪病^{さり}きて、その人きよまれり。

今日は「わが意なり」と題に書いた。41節です。ギリシャ語では一番簡単なんです。「テロー」という字です。「カタリスティーティ」「汝、潔められんことを」です。ここに

「御意ならば我を潔くなし給うを得ん」

とある。「ヘアン テレース」「もし、御意ならば」と、やっぱりそう書いてあるな。

あの「御意」という言葉は躊躇になるんだ。

「これは一体、御意でしようか」
なんて、人に聞いてみたりね。

「どうも、御意がわかりません」

とかね。祈る時にも、「御意ならば」なんて真似して祈つてゐる。どうするんですか、この「御意ならば」は。キリストもそう仰つた、

「汝の御意をなさせ給え」

と。キリストの生涯の祈りはこれに尽きると言つてもいい。

「聖意が成就するように」
と。ところが、私は聖意体現と言つたでしょ。



「汝の意志が私を通して成就するように」

ということです。「私を通して」というのを抜かしてはダメですよ、「御意ならば」とか

「御意を成してください」

とか、傍観して祈つていたのでは。

「私は分かりません、あなたの御意は。けれども、どうぞ私を通して成つてください」

と。ぶちまけるんです、キリストに。キリストに自分を、先ずぶちまけて、中へ入れて、それから自分の願いたいことは願つてくださいよ、遠慮はいらないから。それで、成らなかつたらば、それは御意が成つていない。成つたらば、それはやつぱり御意に沿つていたと。御意は別なところにある。わが悲願をキリストの本願にぶつける。自分を先ず入れてから。そうして、それがマイナスと出ようが、プラスと出ようが。本当の絶対的なマイナスは、この相対的なプラスにおいても、相対的なマイナスにおいても、絶対的プラスはそれを貫いて進んでいるということを信じ抜いていかなくてはダメなんです。

「どうもこの頃、あまりうまくないな」

なんて、いろいろな妙なことに合つてみたり、

「一向、親父は聞いてくれない」

とか。

「御意はどこにあるか」

と悩んでみたり。

「どうにでもなれ」

と、自分には。

「勝手にしやがれ」

と自分に。

「必ず神さまは最善を控えていてくださる」

と、それくらいの因太さになつていかなければ。もう、運命環境に屈託したらダメですよ。回りに病人がいたり、いろんな事が起きるよ、人生は。雲が晴れたと思ったたら、またやつてきたり。雨が降つてみたり、嵐になつてみたり。しかし、

「雲の彼方には太陽はなお照つている」

という。こういう、

「御意は、自分を神・キリストの中に投げ入れているかぎり、必ず体現して来るぞ」ということです。

私は、こんな鈍器だけれど、呑氣なんでね、いつどこでぶつ倒れて未完成であろうと、私の著作集はシユーベルトのように「未完成交響楽」という。本当は十巻なんかで終わるものではないんだ。何巻までいくのか分からんんだ、本当は。そんなことをあまりやつ



ているとしようがないから。もう死ぬ時は、お金なんかひとつもいらん。大体、この著作集からは私は一銭ももらつてあるんじゃないから。とにかく、出ればいいんだ。神さまに献げているものだから。

そういう御意はもう成りつつあります。「成らせ給え」ではなくて、

「御意は成りつります。感謝いたします。御名を讃えます」

と言つて進んでくださいよ。「成させ給え」ではなくて、「成りつります」と。図太い野郎だね、これは。

「私は、躊躇したり転んだりするしようがない破れ器ですけれども、成りつつあります」

と言つて、キリストの本願の御力^みに絶対信頼して——いや、信頼どころじゃない——動かされて進んでいく。どんなに失敗したつていいよ。

「ああ、しまつたな。私はこんなことをするんじやなかつた」

なんて。それを跳躍台にして、今度は更に前進ができる。落第したつていいよ、入学試験に。

「何をか」と。

私は一浪だ。一浪で一年間勉強して、私は本当に実力がついてしまつたからね。もちろん、私は一高に入れたんだけれども、一高に入れなくて一向に残念だった。憧れていたからね、一高には。

とにかく、すべての体験が、キリストを信じぬく者には必ず全部プラスになつていく。極限状況を見ればわかるでしょ。片一方の十字架上の盗賊は最後の瞬間に、

「私は散々悪いことをしました。せめて、聖国にいらつしやる時、私を覚えてください」

「汝、今日、我と共にバラダイスなり」

と。あの盗賊は、あのキリストの言葉を聞いたら、どんなにか喜んじやつてね、キリストと一緒に天界に往つてしまつた。片一方は地獄に墮^おちた。あれがはつきり表しているんです、「碎けか、碎けざるか」という人間の二つの分を。これは『無者キリスト』にも書いてある。そういうことで、キリストの御意は必ず成ります。それは自分が分かろうが分かるまいが、いいんです、そんなことは。神さまの思いが全部分かつてどうするんですか。それだったら、神さまじやないか。こつちは人間じやないか。人間には神さまの意が分からぬんだ。

「何か知らんけれども、私はもう100%に信じしていくぞ。どんなことがあつても地獄におちてもと。

「たとえ殺されても

とヨブ記に書いてあるではないですか。

「地獄に墮ちるのはこれ必定^{ひつじょう}である。ただ念佛する他になし。救われるか救われないか知りません」



なんて、親鸞も言つたではないか。愉快だね、あれは。あれが本当の信仰です。私たちは、福音と言うならば、それだけのもの凄いものがある。

ただワツシヨイワツシヨイと祈るんじゃないですよ。

「なんだ、あの野郎はちつとも祈らないじゃないか」

なんて。

「どつこい、沈黙の雄叫びがありますぞ」

と。皆さん、本当に自信なうざる自信をもつてくださいよ。

●靈的な癌は罪

癩病人でも潔まつてしまつた。それから、癌だつて治つちやうよ。癌が祈りで治つた例を私は知つてゐるもの。聖靈の力はあらゆる細菌よりも強い。でなかつたら、聖靈ではないですよ。だから、絶対にへこたれていかん。もちろん、人間にはそれぞれの運命があります。みんなこの肉体のままいつまでも生きるわけにはいかない。けれども、その奥に靈体が現れている。癌は治つても治らなくとも、そんなことは問題にしない。根源においては、癌は——癌であろうと何であろうと全部——治つてゐる。

人間の癌の一番しようがないのは「罪」ではないですか。肉体の癌よりもやつかいのははこの「罪」という癌です。これは誰も治せない。お医者さんは、或る時は癌を治す時があるかも知れない。罪ばっかりは、これは治らない。誰も治すことのできない罪をキリストの十字架が贖つてしまつた。これは癌ですよ。靈的な癌は、罪というやつ、自我という我執というやつです。

我執が一番悪いものだとは、西郷南洲も言つてゐる。

「己を愛することは最大の惡である」

と。こないだは、南洲の百年祭だつたね、城山で仆れたんだ。6月24日か。あの南洲は人生50年、50で仆れたひとだ。けれども、天を相手にして生きていたから、あのような大人物だつた。今の政治家も、天を相手にするような魂が、そういう人物が欲しいね。今は、学校教育で大事なのは、そういつた人物をつくることなんだよ、人間を。なにも偉大な人間でなくともいいから。とにかく本当の、そういつた人間をつくることです。

●根源の現実

罪と肉体の癌も全部、キリストがすべての病を癒し、すべての罪を赦してしまつた。これはキリストという驚くべき神の子です。キリストの外に、いずこに行つてどうなるんですか。

そういうわけで、癩病も治つてしまつた。それで、⁴²直ちに癩病さりて、その人きよまれり。⁴³頼^{やが}て彼を去らしめんとて、厳しく



戒めて言い給う、⁴⁴『つつしみて誰にも語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モーセが命じたる物を汝の潔^{きよめ}のために獻^{ささ}げて、人々に証^{あかし}せよ』

キリストは旧約聖書のそういうことは、ちゃんと一応は守るように言っているね。ユダヤ人だから。けれども、中身は違うんだということです。モーセが命じたようにやれと。潔めの礼のことがある。これはレビ記14章をずっと見てください。書いてありますから。

⁴⁵されど彼いでて此の事を大に述べたえ、遍く弘め始めたれば、この後イ

エスあらわに町に入りがたく、

あまり大勢やつて来るものだからね、

外の寂しき処に留まりたもう。

「外の寂しき処」というのは、外の寂しき処で神さまの懷の中に入つたということです。

人々、四方より御許に来れり。

あと、中風を癒したとか、いろんなことが書いてある。福音書では、とにかく、悪鬼が追い出されたり、病が癒されたりしたことがずいぶん書いてある。ことにマルコ伝はね。けれども、それが福音だと思つてはいかんですよ。申し上げているとおり、我々の魂の世界も、肉体の世界も、根源の現実においてキリストが救つてゐる、ということが大事なんです。現象面ではないということです。だから、

「癒されないから、私はまだ祈りが足りないのか」

なんて、そんなことを思うなということ。

「祈りが足りない」

のではない。キリストの中に

「入り方が足りない」

んだ。入れば、神さまの御意が、今癒すと思えば癒すし、ちょっと待てと言えば待つし。そういうことは自在にならなければいかん。

「あの人は早く治つてしまつたが、私はまだ治らない。まだこれは信仰が足りない

のか」

なんて、そうじやないですよ。即刻、パツパツと治つたりすることもあるし。いいんだよ、どれだつて。どうすることにもこだわらない、本当の彈力性はどこから出てくるかというと、

一番根源の世界を持つていれば、そういうことになる。自分自身は無なんです。何も無い。今日のマルコ伝第1章の終りは、要するに、キリストの、このような癪病人だとか熱病だとかをお癒しになつたという、そういう事柄をただ私たちは感心するのではないので、その奥の、キリストが本当に力の根源にあるということです。そしてこの力は愛の力ですよ。ですから、それが本当に人を救つていく、助けていく。助けざるを得ない。聖靈はそういう靈です。おわります。

